中世【p.98-140】

98ページ　院政

【考察解答】

❶北面の武士や平氏・源氏などの武士を動員して僧兵たちの強訴を防ぎ対抗した。

❷摂関政治は母方の家長が外戚として国政を動かすのに対し、院政は天皇の父方の家長が皇位継承の指名権をにぎって政治を行った。

❸受領層からなる院近臣たちの成功による収入のほか、全国からの荘園寄進による荘園群や、院自身や院近臣を名義人とする知行国からも収入があった。

【解説】1069年、藤原頼通らの娘が次期皇位候補者を生まないまま、禎子内親王を母にもつ後三条天皇が即位した。後三条天皇は、天皇のイエ＝王家の家父長として延久の荘園整理令を発したことに加え、王家の家産の形成、宣旨枡の制定や、側近大江匡房らの登用により、天皇のイエそのものが摂関家の意向とは独立した政策志向をもてるようになった。後三条天皇自身の親政はわずか四年で終わったが、王家の家父長の人物が天皇との父と子ないしは祖父と孫という血縁による上下関係によって国政を左右する「治天の君」による政治が始まる。これは、実際には上皇にはならなかったのに、鎌倉初期の説話集である『古事談』などで後三条天皇が「後三条院」とよばれていることにも表れている。

99ページ　平氏政権

【考察解答】

❶平治の乱に勝利した平清盛とその一族が権力をにぎるようになった。

❷清盛の娘である徳子が高倉天皇に入内し、その間に生まれた安徳天皇を即位させることで平氏は天皇の外戚となり、権力をもった。

❸500か所以上の荘園や30か国余りの知行国からの収入に加えて、日宋貿易でも莫大な利益を得た。

【解説】平治物語絵巻は『平治物語』を題材にした軍記絵巻である。現存している作品は、アメリカのボストン美術館が所蔵している「三条殿夜討巻」を含めて、いずれも13世紀の作成とされる。絵画自体は数多くの絵師たちの共同作品であるが、詞書は一人の筆になると考えられている。もとになる『平治物語』は、諸本によって内容の異なる箇所が相当ある。そのため、断定はできないが、物語の主役が貴族から武士に移っていくさまがうかがえる点に特徴がある。

100ページ　院政期の文化①（絵画）

【考察解答】

❶人気の王朝文学作品を目に見える形にして楽しむ材料であった一方、教養の高さと財力を示す調度品でもあった。

❷初めは貴族の登場する物語絵巻などがおもであったが、庶民の生活を題材にしたものも描かれるようになった。

❸初めはおもに貴族の女性などに観賞されたが、公家・武家・僧侶など、鑑賞者も広がっていった。

【解説】絵巻は貴族などの権門の人々が資力をつくして絵師などを雇い、人気の高い文学作品の場面を目に見えるようにして鑑賞するためにつくられた。また、総巻の鑑賞には深い教養を必要とするので、絵巻をもっていること自体が権威財として評価されるようになった。一方、寺社もその信者や民衆からの崇拝を獲得するために寺社の霊験などを描き込んだ縁起絵巻をさかんにつくるようになり、絵師たちのまなざしも庶民の生活を題材とするものへと広がっていった。

102ページ　院政期の文化②（信仰）

【考察解答】

❶熊野は浄土の地とされ、そこをめぐることは再生も意味したので、上皇たちはあつく信仰し、参詣を繰り返すことで極楽往生できると信じたため。

❷院近臣などを通じて全国につくられた荘園や、受領の成功による収入などでまかなわれた。

❸都の文化にあこがれをもつ地方豪族によって、中尊寺金色堂や白水阿弥陀堂などの阿弥陀堂が建立された。

【解説】熊野三山は本宮・速玉社・那智社からなる。熊野は、「記紀」の「神武東征神話」で神武天皇が八咫烏に導かれてヤマト平野に入っていく地であるため、神聖視された。そして三山全体を母胎に見立て、この胎内をめぐるとけがれがとれ、魂が再生すると信じられた。また、浄土教が普及すると「補陀落渡海」の出発点となり、院をはじめとする権門は、極楽往生と王権の再生を願い、参詣を繰り返すようになった。その道中を民衆に見せることは権威の所在を見せる意味ももつようになり、これに奉仕する中下級貴族らにとっても成功などの絶好の機会となった。そのため、院宮家には院近臣が仲立ちとなった荘園の寄進が集中し、六勝寺造営と並んで、熊野詣のための財力が蓄えられた。

104ページ　奥州藤原氏と平泉文化

【考察解答】

❶金色堂内陣の装飾は、蒔絵に奥州の特産である金や漆が用いられ、螺鈿には南方交易によってもたらされた夜光貝が使われている。また、奥州特産の金は、経典にも用いられた。

❷奥州特産の金や馬、北方世界との交易品などの財力があったため。

❸仏教による平和な世の中を理想とし、奥羽の安泰を願ったから。

【解説】平泉の中尊寺は鳥羽上皇の御願寺として建立され、初代清衡以来、奥州藤原氏は長い戦乱を鎮め、仏教都市を建設して平和をもたらす意図をもっていた。この普遍的な願いは、平泉がユネスコ世界遺産に登録される理由ともなった。また、京都の浄土系庭園を模倣しつつ、八幡神や天照大神を崇拝した京都の政権とは一線を画し、中国宋代の天台系寺院を建立し、地上に「仏国土」をうち立てようとした。これを、東北を支配する政権としての自立性を主張したことの表れとみる学説もある。この時期は、東ユーラシアの金や西夏などが力をもち、中国大陸の北宋と肩を並べるようになっていたため、このような国際情勢と呼応する動きととらえることもできる。

105ページ　源平の争乱（治承・寿永の乱）

【考察解答】

❶平氏の武士は、合戦で親族が戦死すると喪に服し、軍糧がつきればその補充のために戦線を離脱するといった慣習にしばられていたから。

❷千葉・三浦・上総などの東国の有力な在地武士が頼朝に対して、今は東国の経営に専念するべきであることを進言したから。

【解説】10世紀の東国の戦いを描く『将門記』でも、戦況に応じて戦場を離脱するものは多い。親族の屍ものりこえて前進し戦場から離脱しないという、『平家物語』が描く東国武士の戦法は、新たな戦い方であった。近年の研究では、平維盛に東国武士の豪胆さを語った斎藤実盛は富士川の戦いには参加しておらず、この逸話は、『平家物語』の虚構であることが指摘されている。現実には、戦況によって逃げ散る「駆武者」の存在も源平ともに確認されるという。そうした不安定な主従関係や、12世紀後半の東国社会で頻発していた武士同士の土地争いを、頼朝が棟梁として治め、東国御家人の土地支配権を「御恩＝本領安堵」と「奉公＝軍役・番役の遂行」で統御したことにより、より強固な結合が芽生えた。なお、一の谷の合戦における義経の「鵯越の逆落し」の逸話も、虚構として歴史学上否定されている。

106ページ　鎌倉幕府の成立

【考察解答】

❶藤原朝政は、「鎌倉殿」である源頼朝に自らの土地の領有権限を認可された事実と頼朝との直接的結合にこそ価値を認めており、「政所」という機関からの下文だけでは満足できなかったから。

❷鎌倉殿による本領安堵・新恩給与などの所領保障を御恩とし、それに対して御家人は軍役や番役などの奉公を行うことによって報いる、封建的主従関係。

❸公領・荘園ごとにおかれ、管轄地の管理や治安維持、年貢徴収の監督などを職務として、従来の荘園収益を継承した。

【解説】鎌倉幕府の御家人は、その出自が私領主・国衙官人のいずれでも、領有を主張する土地の支配権をめぐる近隣領主との激烈な闘争を繰り返してきた。かつて東国武士の尊崇を集めた源義家の子孫にあたる源頼朝に、その領有権認可（本領安堵）を求め、そこで初めて地域の安定が実現した。彼らは「鎌倉殿」頼朝との直接的結合を重視し、頼朝の「御家人」となることで軍役と番役を果たし、反対給付としての新領地の付加（新恩給与）を望んだ。この関係が御家人制とよばれる主従関係であった。彼らは、土地の治安と現地からの収穫物を年貢として国衙・荘園領主に納入することに責任をもった。それゆえに、「鎌倉殿」からは「地の頭」を意味する「地頭職」に任じられた。

108ページ　幕府構造の変容

【考察解答】

❶頼朝が平氏を滅ぼし、幕府を開いて以来得られた御家人の官位や俸禄などの御恩。

❷幕府は承久の乱で朝廷側が領有していた土地に東国武士を新補地頭として補任し、新補率法にもとづいて権限を与えた。

【解説】承久の乱は、後鳥羽上皇が軍事権門としての幕府のもつ武士の統制権をも吸収し統一的な統治権を掌握しようとするところに起きたが、軍事的に幕府軍に敗北した。この結果、朝廷側についた武士の所領は幕府側に没収され、幕府御家人に、軍役（奉公）に対する褒美（新恩）として付加された。また、彼らには地頭職の得分として新補率法が法制化され、適用されるようになった。その結果、幕府の政治勢力が朝廷側の武士の所領が広がっていた西国にものびるようになった。なお、注意しなければならないのは、同じ東国武士の中でも、兄弟や親子のどちらかが京都大番に出ていたことがあり、イエを残すためにあえて東西に分かれて戦った事例もあったことである。

110ページ　武士の生活と役割

【考察解答】

❶自らも移動する馬上から、敵に見立てた標的を正確に射抜く、実戦的な技術が必要とされた。

❷武士が居住した館は質素な板敷きの住宅で、持仏堂を併設していた。防衛拠点にもなりうる武備を備えており、馬場で日常的に馬術の訓練をして、鷹狩りなども行った。

❸一定額の年貢を荘園領主に保障するかわりに全面的な支配権を認められる地頭請所、下地（土地）を分割して荘園領主と地頭が排他的に支配権を行使する下地中分などの方法で権利を拡大していった。

【解説】近年、国宝に指定された足利氏の居館を寺にした鑁阿寺に代表されるように、中世の武士の館は厩・やぐら・堀・塀などを備えており、防衛拠点にもなりえた。また、幕府の御家人の多くは地頭職・守護職に補任されており、武力を背景にした荘園内の治安維持や年貢の収取と領主への納入に責任をもった。紀伊国阿氐河荘の地頭 湯浅氏が、麦をまかない、百姓の妻らに「追いこめて髪を切り耳を切り鼻をそぐ」体刑を与えるとおどしていることは専横な地頭のイメージをつくり出すのに一役買っていた。しかし近年、この種の体刑は、多くの事例が知られ、僧や子どもと同様に社会の枠外におかれた女性への死一等を減じる措置として常態だったという見直しが進んでいる。

112ページ　蒙古襲来と鎌倉幕府

【考察解答】

❶元軍は集団歩兵で攻め込み、弓矢と殺傷力の高い火薬「てつはう」を爆発させるところに特色があったが、日本の武士は、騎馬武者が単騎で攻撃する点に特色があった。

❷博多湾沿岸一帯に御家人らに防塁を築かせるとともに、九州の御家人たちには異国警固番役を課し防衛体制を固めた。

❸元軍迎撃の体制づくりの過程を通じて北条一門が要職を独占し、得宗による専制が進んだ。また、幕府支配も非御家人の武士に及ぶようになった。しかし、多くの御家人は恩賞なき戦費負担に苦しみ、分割相続の慣習ともあいまって窮乏化していった。

【解説】元（大元ウルス）は対南宋攻略や東ユーラシア海域での貿易流通網の掌握をねらい、日本列島へ侵攻した。近年の長崎県鷹島沖での水中考古学の成果から元軍の用いた「てつはう」の中に込められた鉄くずや火薬の殺傷力の高さが証明された。1286年には御家人の統括・訴訟受理のために鎮西談議所を設置し、1290年代に設置された鎮西探題がその機能を吸収した。元の襲来は、ベトナムでも３次にわたって行われたが、いずれも退けられた。日本では異国調伏のための寺社祈禱が行われたが、台風が重なったこともあって撃退できたことから、「神国」思想が形成された。

114ページ　農業と商工業の発展

【考察解答】

❶さまざまな価値を銭に換算できるようになり商取り引きの利便がはかられた。年貢も銭納となり、社会全体に貨幣経済が浸透して、土地や生産物を担保にとった金融が可能となった。その結果、金融業者である借上などが登場した。

❷二毛作や牛馬耕、施肥が行われるようになり飛躍的に農業生産力が上昇した。鋳物師や番匠などの専門職人が成立し、座を組んで朝廷や寺社に貢納する見返りに保護を得て活発に活動した。

❸年貢の銭納や遠隔地間の決済に為替が使われて信用経済が発達した。また余剰生産物の取り引きのために定期市が普及した。京・鎌倉などの都市では商品を陳列する見世棚を備える店も出現した。

【解説】遼・金・元などとの軍事的対決や経済的需要のために南宋が対外貿易の振興を積極的に進めた12〜14世紀には、大量の中国銅銭（中国渡来銭）が列島社会に流入し、通貨として流通した。それは日本社会を統治する権門が分立する政治状況とも適合し、統一的な貨幣を鋳造しなくなることを許した。また、耐旱性にすぐれ炊き太りする占城稲＝大唐米の流入・定着、二毛作の普及など民衆生活を支える食料の拡大や多様な物資生産と流通をもたらした。このため、地域物資の交換の場である三斎市や、年貢・商品の遠隔地輸送・保管・売却を担う問（問丸）などの通商活動や為替を生んだ。売買を公正に行うため、神仏をまつり世俗権力の及ばない、寺社の境内などに市が立つことが多かった。

116ページ　鎌倉文化①（彫刻）

【考察解答】

❶現実に生きている人間の個性豊かな表情や、筋肉・血管の浮き出し、玉眼によるリアルな表現技法など、身体的特徴をとらえて写実的な彫刻に仕上げている。

❷運慶・快慶は、奈良を本拠地として写実的な天平彫刻に学び、南都復興の際には、東大寺や興福寺に新しい時代の精神を生かした力強く人間的な作品を数多く残した。

【解説】国家仏教一辺倒を脱し、密教や浄土思想の影響下に個人の煩悩を救い極楽浄土への往生を果たす役割をもった仏教思想を反映し、実在する人間の表情やしぐさなどに仏師の目配りが届くようになった。平安中期に活躍した定朝の工房では寄木造によって工期短縮と量産を実現したといわれる。69日間で完成された東大寺南大門金剛力士像は、1988年からの解体修理によっておよそ3000個の部材からなっていたことが判明し、寄木造の効用を証明した。康慶・運慶ら慶派とよばれる奈良仏師の一派は、写実的な彫刻の造像にすぐれていた。とくに康慶は、天平期・貞観期の仏像に学び、その写実性をよみがえらせたといわれる。

118ページ　鎌倉文化②（仏教）

【考察解答】

❶当時の仏教が戒律や修行を軽視していたことを問題と考え、明恵ら「旧仏教」は菩提心を求めて修行を実践した。

❷権門寺院が荘園領主として肥大化し、僧が本来の修行を軽視して破戒が進んだ結果、南都焼打ちが起こったと考え、戒律復興を唱えて仏教の再建をはかった。

❸「旧仏教」も「新仏教」も民衆の救済を説いたが、「新仏教」は、往生に関して現世の階層は無関係で平等であると説き、単一の行の専修（念仏・題目・禅）を主張した点が「旧仏教」と異なった。

【解説】鎌倉仏教の特色を「新仏教」に求める考えは見直しを迫られている。鎌倉時代は「新仏教」は異端にすぎず、王法を守る顕密の仏法こそが正統であり、顕密寺社への奉仕こそが浄土への往生につながるという考え方がいまだ主流であった。しかし、その肝心の顕密寺社が荘園領主としての利益追求にはしった結果、下級の破戒僧が幅をきかすようになった。南都の焼打ちはその現状への反省を「旧仏教」に迫り、戒律を重視する改革運動が始まった。

120ページ　鎌倉文化③（文芸・絵画）

【考察解答】

❶源平の争乱や承久の乱、蒙古襲来などの戦乱や災害が続く、変転きわまりない不安定な社会。

❷『愚管抄』では「道理」の変転により歴史がとらえられ、『方丈記』では五つの災難を通してこの世の無常が実証された。このようななかで、何一つ変わらないものはなく、はかなく無常であることが共通意識となった。

❸かつて人物の顔が「引目鉤鼻」で無個性に描かれたのとは異なり、量産された絵巻物や似絵、頂相では、人物の個性・表情をとらえ、写実的にいきいきと表現するようになった。

【解説】『平家物語』が平家をさして「猛き人もついには滅びぬ」と記すように、すべてのものがはかなくうつろうと観ぜられたこの時期は、鴨長明・西行・無住・兼好法師など、政界や仏教界あるいは武士の世界での挫折を経験した遁世者が多く存在した。俗世の呪縛を脱した彼らは個性に注目し、人間的真実に触れる世界を描いて、『宇治拾遺物語』などの仏教説話集や随筆『徒然草』などが編まれた。寺社の縁起を絵解きするための『春日権現験記』や軍記物語を絵画化した『平治物語絵巻』などが次々に制作されたことにはこのような背景がある。

122ページ　建武の新政と南北朝の動乱

【考察解答】

❶礼冠と直衣は国の統治者である王としてのイメージを、袈裟・密教法具は仏の世界の頂点に立つ意味を、また狛犬や御帳は神格をそれぞれ表し、俗権と聖権の融合を表している。

❷幕府を倒し、院・摂政・関白などを廃止して天皇の直裁による政治をめざし、武士の所領安堵権も吸収しようと試みた。

❸後醍醐天皇は自らの皇子を各地に派遣して地域勢力の編成にあたらせたが、初期に有力武将を失い軍事的に劣勢になった。そのため、敵対する勢力と結んで勢力維持に努めたが、かえって内乱を長期化・複雑化させ、九州地方の一部と吉野地域での勢力しか保てなくなり北朝に下った。

【解説】後醍醐天皇像は、国の統治者である王・仏・神を象徴しており、天皇が自らへの権力集中をはかったことを示している。実際、天皇は、鎌倉幕府を倒し、院・摂政・関白などを廃止して天皇の直接的裁可による政治を志向した。このこと自体、中世政治史においては「異形」であった。この像の制作主体は、天皇と密教修法で深いつながりのあった僧 文観と目されており、天皇自身の政治的志向を表すと同時に、天皇の死後、南朝のメンバーによって仏事を営む際の礼拝の対象になっていた可能性が高い。

124ページ　室町幕府の構造

【考察解答】

❶准三后ののち、律令制の最高機関である太政官の最高位 太政大臣に任じられた。

❷１．土岐氏、山名氏、大内氏などの有力守護大名を武力制圧し、幕府の内部統制を進めた。２．積極的に明との交渉にのりだし、朝貢貿易を行って「日本国王」に封ぜられた。日明貿易では本物の使節か判別するために勘合が用いられた。

【解説】足利義満は南北朝動乱の辛酸をなめ、幼時に播磨の赤松氏に庇護されるという経験をしたため、青年期に達すると秩序の回復・安定に意を注ぎ、管領や有力守護の更迭・抵抗の排除など幕府内部の統制に努めた。さらに「南北朝合一」を積極的に仲介し朝廷内地位をきわめた。また、明から与えられた「日本国王」号から唱えられた義満の「皇位簒奪」説は近年後退し、対明外交の目的はあくまでも朝貢貿易による実利にあったといわれている。

125ページ　室町時代の交易

【考察解答】

❶14世紀半ばより明は人間や物資を略奪する倭寇の被害に悩まされていたので、日本に対して強力な政権による倭寇の制圧を求めた。

❷中国や朝鮮の王朝交替と、南北朝の動乱の長期化で、五島・壱岐・対馬や瀬戸内地方などの西日本の武装集団は生活物資や労働力を求めて朝鮮半島・中国大陸へ侵攻した。

❸日明間では、日本から硫黄・刀剣・漆器・銅、明から陶磁器・絹織物・生糸等が取引された。日朝間では、日本から硫黄・銅・香木、朝鮮から大蔵経・木綿・朝鮮人参が取り引きされた。

【解説】14世紀後半〜15世紀初めは東アジアの大変動期であった。中国大陸では紅巾の乱による元の滅亡、朱元璋による明の建国があり、朝鮮半島では元の姻戚だった高麗が親元派と反元派に分裂・抗争し、倭寇討伐に功のあった反元派の李成桂が朝鮮王朝を建国した。日本列島は60年近く南北朝の動乱が継続したため、東アジアへの倭寇の侵略を抑止できなかった。明と朝鮮に新王朝ができると倭寇の抑止が共通の政治課題になった。そして、室町幕府の安定期にあたる15世紀初めに、ようやく勘合による日明貿易や文引による日朝貿易（ともに新王朝が統制力をもつ交易の形）が成立することを、アジア史の視点から理解しておきたい。

126ページ　惣の形成と一揆

【考察解答】

❶今まで蜂起したことのない交通業者である馬借などが主体となり、利害を同じくする人々が同調してまたたくまに畿内地域に広がったから。

❷日常の農事や村落経営のなかで宮座などの組織がはぐくまれており、寄合で行われる合議や掟が人々を強くしばっていた。

❸土一揆は債務関係破棄を求める徳政を要求し、徳政一揆ともよばれる。国一揆は戦乱からの地域の秩序回復を目的にし、指導層による自治を要求した。一向一揆は浄土真宗門徒が守護大名の地域統治権を奪い、自治を要求した。

【解説】柳生の徳政碑文に表される徳政については、『春日若宮社頭日記』に「里別ニ得政ヲカルナリ」と記述されていることから、里ごとに行われた在地徳政であったことが通説となっている。また一揆には、「揆（計画）を一にする」という原義があり、中世社会のあらゆる人間関係に関与した。たとえば権門寺院の大衆組織、都市の町衆組織、商工業者の座、惣村の宮座や寄合、国人の武装組織、武家の家臣団の結合、茶会や連歌会などはいずれも構成員同士の水平的・平等な結びつきを基盤にして、相互の利益を守る機能をもった。内部構成員には徹底的な合議による規律決定権があり、その規律の違反者には厳しい制裁が待っていた。一方で、組織外部にはきわめて閉鎖的でもあった。このような一揆を基盤にして、人々は組織としての意思決定をなし行動を起こす原動力とした。中世は人間同士の相互結合の力が強く、団結して社会を動かす時代であったといえよう。

128ページ　惣と農業の発達

【考察解答】

❶鎌倉期には米・麦の二毛作だったが、灌漑技術などが発達したことにより、畿内では米・麦・そばの三毛作が行われるようになった。

❷水車やなげつるべ、龍骨車の普及による灌漑技術の向上、占城稲（大唐米）など干害に強い品種の普及、また都市での人糞尿を利用した下肥の使用など。

【解説】14〜16世紀にかけては、水利共同体としても惣村の形成が進み、惣掟にもとづいた労働集約的な農業が可能になった。日本の河川の特性である流れの速さを利用した水車を用いた揚水技術、人力による龍骨車という揚水機などの普及で灌漑技術が向上した。なお、宋希璟は、応永の外寇の回礼使として1420年に来日し、その紀行文は『老松堂日本行録』として知られる。15世紀前半の日本列島の生活を外国人の目で記録した希有な史料である。朴瑞生は1428年に朝鮮通信使として来日。帰国後、水車を試作したが、急流の少ない朝鮮では普及しなかった。製塩業もさかんになったが、説経節『山椒大夫』に描かれたような人身売買を前提にした労働力編成が伴うことも忘れてはならない。

129ページ　手工業と商業の発達

【考察解答】

❶木綿帆は耐久性が強く、従来使われていた筵に比べるときめが細かく風をよくとらえることができた。また、衣料原料としても防寒機能が高くよく汗を吸い取ったから。

❷農業の生産性が向上し、商品の需要が増えて、専門の手工業者が質の高い商品を生み出していったから。

❸朝廷や寺社に営業利益の一部を貢納するかわりに、供御人・神人などの身分を与えられ津料や関銭などの通行税の免除や仕入れ・販売の独占権などを保障されて営業を有利に進めた。

【解説】中世後期には各地の特産物資の生産・流通規模は格段に増大し、列島の輸送網は日本海・瀬戸内海・太平洋に拡大した。近年、瀬戸内の兵庫や江戸内湾の品川などでは船舶に課された出入港税の台帳に関する研究が進み、交通圏の拡大が明らかになっている。また日朝貿易によってもたらされた木綿は衣料素材・船舶帆材、さらに火縄銃の導火線として必需品となった。定期市の頻度も月に６回の六斎市が常態となり、大都市には常設の見世棚をもつ店舗が定着し、永楽通宝をはじめとする明銭の流通が経済を支えた。消費地と生産地の行商を担った連雀商人や都と郊外をつないだ桂女・大原女など女性の商業活動も活発だったことにも着目したい。

134ページ　室町文化①（南北朝・北山文化）

【考察解答】

❶椅子に座り、絵画や工芸品などの希少な唐物をかざった中国風の空間。

❷金閣は三層造りで、公家と武家、さらに禅宗様式の折衷であった。また、庭園は池泉廻遊式で池をめぐりながら鑑賞する。

❸海外事情に精通していた五山僧は、五山版とよばれる中国の詩文や文学の出版・作成を行った。また将軍とも接する機会が多く、ともに中国絵画の代表である水墨画を楽しんだ。

【解説】約60年の南北朝の動乱を収拾して安定期を現出した足利義満は、戦乱に追われた幼時の体験からも、守護大名の勢力をそぎ将軍権力の見せ方を工夫した。中国宋代の皇帝権力が寺院を統制するしくみにならい、京都・鎌倉の臨済宗寺院を対象とする五山十刹制度を整備し、僧録を通じて五山僧の統制に努めた。したがって五山僧は日明外交・貿易の外交官としても活躍し、中国語で詩文や文書をつくる五山文学が盛行した。流行の範を中国大陸の建築・室内装飾などにとり、権威財としての「花の御所」・「北山殿」（鹿苑寺金閣）などの造営に生かした。この時期の文化は、外来文化を摂取して在来の文化と融合させ、新しい文化を生み出す試みであったともいえる。

136ページ　室町文化②（東山文化）

【考察解答】

❶池泉廻遊式庭園は樹木や草花を見ながら池をめぐる庭園である一方、枯山水は禅の考え方を背景に砂石のみを配した庭園であった。

❷様式化されていた中国風の水墨画は、雪舟によって大胆で力強い日本的な水墨画に発展し、さらに狩野派によって大和絵の彩色の技法が重ねられ発展していった。

❸書院造や枯山水が積極的に摂取され、きらびやかな装飾を排した簡素・質素を基本とする建築物が定着した。

【解説】足利義満によって整備された臨済禅を基調とする中国文化摂取の流れは、15〜16世紀には枯山水の流行にみるように抽象性を高め、雪舟が中国で水墨画の描法を習得しつつ日本の風物を画題にして描いたように、十分な中国文化の吸収のうえに発展した点が特色である。書院造の室内装置（畳・障子など）が現代の「和風」建築のしつらえの基本となっている点からすると、東山文化は「和風」の基本をつくったといえる。なお、龍安寺は16世紀に徳大寺家の別荘を寺院にしたもので、その石庭の造園時期には諸説あり、同朋衆の相阿弥作という説もある。近世には池泉廻遊式庭園の方が石庭よりも有名だったようである。

138ページ　室町文化③（庶民文化の発展）

【考察解答】　❶もともと野外で自然の松などを背景にして上演されたが、現代の能も鏡板に松が描かれ、役者が舞台へ登場してくる通路なども共通する。

❷能の重厚な演目の幕間に軽妙でこっけいな狂言が演じられた。また、身分の流動性をはらんだ社会のなかで立身出世を願う庶民の願望を背景に御伽草子などが編まれた。

【解説】室町期の文化の特色の一つは、南北朝の動乱を経て、社会のあらゆる場面で人と人がつながりをもち利害や志を一致させる集団「一揆」が結ばれたことであり、それを支える文化が広がったことである。茶会・連歌・能や狂言などはいずれも集団で楽しむ要素が基底にある。その場面での「座」的結合は一揆を組む恰好の機会になり、そこに居合わせる人々の結びつきを確認する場となった。また、下剋上の風潮を反映して社会的身分の流動性を前提とした文化の発展も一つの特色で、とくに経済力の蓄積は血縁や家がらをこえて尊敬の対象となった。御伽草子の「一寸法師」などにみられる立身譚は当時の人々のあこがれや価値観の表れである。

139ページ　室町文化④（文化の地方伝播）

【考察解答】

❶山口を領国とする大内氏によって宗祇・雪舟などを迎えて京都を模倣する文化が栄えた。

❷応仁の乱を契機に京都が荒廃したため、数多くの文化人・公家が、安定した領国経営を行う戦国大名の城下町へやってきた。また戦国大名も彼らを厚遇することで、領国経営の権威を示そうとした。

❸15世紀に日蓮宗には日親、浄土真宗には蓮如という有能な組織者が輩出した。日親は京都の町衆に、蓮如は、御文というわかりやすい手紙によって各地の信徒に教えを浸透させていった。

【解説】応仁の乱（応仁・文明の乱）が京都を舞台にして断続的に続いたため、公家たちも窮乏化を強いられた。彼らは家業として伝承してきた専門技術を教えたり、娘を戦国大名と結婚させたりして経済的な基盤を保持しようとした。かつて荘園領主を勤めたゆかりの地方へ下向し、戦国大名化する家もあった。また多くの僧侶や知識人も京都から戦国大名などの地方有力者のもとへ下ったため、16世紀には、それまで京都ではぐくまれてきた多様な文化が地方に拡散し定着した。地方の戦国大名も、京都の洗練された文化の摂取・蓄積が権威財にもなるため、彼らの下向の動きは促進された。

140ページ　戦国大名の支配と都市の発達

【考察解答】

❶信玄堤を築いて洪水を防ぐとともに、農業生産の振興をはかるなど、民衆の暮らしの安定をめざす一方で、家臣や民衆に対して勝手な私領の売却を禁ずるなど、強力に統制しようとした。

❷領国外との勝手な婚姻・通信の禁止や喧嘩両成敗などによって、家臣団への統制を強めたり、農民には年貢や雑税の納入を強く求めたりして、戦国大名たちは自らの実力によって領国を支配しようとした。

❸城下町には家臣団を集住させるとともに、商工業者を住まわせて税収の確保や物資の把握をめざした。また、交通や商品流通の発展は宿場町や港町を生み、寺社を中心として発達した寺内町や門前町などもつくられた。

【解説】争いの理由にかかわらず当事者の双方を処罰する喧嘩両成敗は、室町時代から国人一揆の契約状にみられることがあった。これが分国法に取り込まれることは、武士の「自力救済原理」を否定し、紛争の裁定者として彼らへの支配を強めていくことを意味した。また、婚姻や通信の制限についても、謀反や内通を防ぐ手段であった。都市は流通の発展に伴って交通の要衝につくられ、多くの人・物・情報が集まった。戦国大名の支配下にある城下町では、家臣団を集住させるとともに、商工業者を集め、迅速な軍事動員と物資の確保をめざした。また、富裕な町人が自治を行う堺・博多などの自治都市や、浄土真宗寺院に多くみられる、寺院を中心に堀などで防御を固めた寺内町などが各地に現れた。それらはしばしば戦国大名と対峙し、ときには強力な軍事力をもつ戦国大名をてこずらせた。なかでも、石山本願寺の軍事力は織田信長にも抵抗し得た。